―住民による行政監視活動の課題と展望―

司会者：小川明子（名古屋大学）
問題提起者：武田剛（屋久島ポスト）
討論者：小黒純（同志社大学）
［企画：小川明子会員］

【キーワード】マス・メディア・ジャーナリズムの衰退、ハイパーローカル・ジャーナリズム、住民参加型調査報道、権力監視、リソース調達

2018 年、Abernathy（2018）は、当該地域についての情報やニュースへのアクセスが制限されているエリアを「ニュース砂漠」と表現し、その拡大に警鐘を鳴らした。ネットでのニュースや情報接触の常態化と、それに伴う新聞購読者数の低下や広告の減少は、世界各地で記者の解雇や地域紙の消滅、統合を促進し、特に欧米では草の根民主主義に対する危機感とともに問題視されてきた。

日本においても、各地で同様の状態が現実化しつつある。日本では記者の解雇などは諸外国よりも比較的抑えられているものの（酒井,2021）、新聞社や放送局の支局統合や市町村単位のニュースを扱う地域紙の消滅が進み、その影響は質量ともに内容面にも及びつつある。付言するならば、市町村レベルの地域新聞やケーブルテレビ、コミュニティ・ラジオも、これまでジャーナリズム活動に積極的だったとは言い難い。ほとんどのコミュニティ・メディアは、同じコミュニティの住民を批判したり対立を促したりすることを避け、地域政治に過度に影響することを恐れて、基本的には、イベントや役所の発表、マスメディアからのニュース再配信などに徹してきた。昨今林立しているウェブ系の地域メディアもほぼ同様の姿勢である。地域の民主主義を支えるための情報やニュースが十分伝えられず、権力監視が機能しない状況が生まれつつあることに対し、日本では、その危機感が関係者以外にさほど共有されていないように感じられる。

こうした状況において、住民自ら行政監視とメディア発信を行うケースが生まれている。問題提起者の武田剛は、元朝日新聞編集委員であり、環境問題の取材を目的に十年前に屋久島に移り住み、そこで依頼を受けて、住民らとともに地元議会や行政をめぐる調査報道メディア「屋久島ポスト」をウェブ上に立ち上げた。討論者の小黒純は、ジャーナリズム研究のかたわら、大津市や滋賀県や地元自治会などを対象にした調査報道を、ウェブ上で実践している。「ウォッチドッグ 」（前身は大津 WEB 新報）は 2015 年 1 月にスタートし、情報公開制度を駆使し、一貫して“しつこい報道”を続けている。いずれも地域メディアの空白地帯に住民自らが立ち上げたウェブベースの調査報道ジャーナリズムという点で一致しており、今後、同様の活動が続く可能性がある。

本ワークショップではまず、こうした現状と課題を問題提起者、討論者の声から確認し、続いて、マスメディアの衰退が懸念される中で、こうした住民主体のジャーナリズム

活動の課題とは何か。そしてどういったアクターが協力してその芽を育て、モデル化していくことができるのかを考える。ジャーナリズム関連だけでなく、地域メディアや市民メディア、法律や政治、ビジネスなど、こうした問題に関心を持つ多様な参加者に集まっていただき、ラウンドテーブル方式でともに考える契機としたい。

ワークショップ１３
韓国ドラマにおけるダイバーシティと社会的包摂

司会者：黄盛彬（立教大学）
問題提起者：橋本嘉代（共立女子大学）
討論者：羅義圭（福岡大学）
討論者：岡田章子（東海大学）
［企画：橋本嘉代会員］

【キーワード】韓国ドラマ、マイノリティ、ダイバーシティ＆インクルージョン、家族、ジェンダー

韓国ドラマは、コロナ禍に急速に普及した動画配信サービスにおいて代表的なコンテンツとしての地位を確立し、全世界で消費されるようになった。近年、特に社会的な話題を集めたヒット作として「愛の不時着」「梨泰院クラス」「ウ・ヨンウ弁護士は天才肌」「イカゲーム」などがある。これらに共通するのは社会の中で周辺的な位置に存在する人物が登場する点である。本ワークショップではトランスナショナルなジャンルとしての韓国ドラマに注目し「ダイバーシティと社会的包摂」というテーマで問題提起を行う。

「冬ソナ」ブームと呼ばれた 2000 年代初頭の韓国ドラマにおいては人物設定や筋書きに固定的なパターンがあり、人間関係や台詞などに家父長制的な価値観が示されるものが多かった。2020 年代は動画配信サービスや韓国ドラマ産業の成長に比例して作品数が大幅に増加し、テーマにおいても多様化が進んでいる。非現実的な設定やドロドロな愛憎劇などが特徴的な「マクチャン」ドラマが人気を維持する一方で、主人公やその身近な存在がマイノリティにあたる属性を持ち、生きづらさと向き合うドラマが支持を集めるようになった。前述の作品に加え「私たちのブルース」などがこれにあたる。これらの作品においては社会的弱者やマイノリティという立場から異議申し立てが行われたり、孤立していた個人や家族が他者とつながり居場所を見つけたり、自己や他者を受け入れる過程が描かれるなど、多様性や包括性の実現に向けたストーリー展開がみられる。

アカデミー賞の主宰団体は、白人男性や異性愛者への偏重という現状を是正するために、2024 年から作品賞の基準を変更する予定である。スタッフや出演者の人種や性別のほか、テーマやストーリーにも多様性が求められ、それが賞への応募条件となる。韓国ドラ